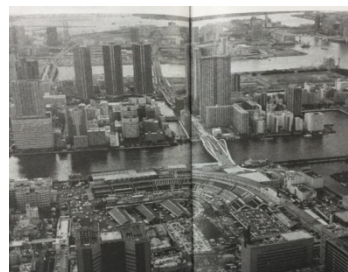


築地市場を歩く

写真は『アエラ』2016年11月14日号に掲載された築地市場全景。一混迷する築地市場移転問題。築地市場は、1935年に開場した。80年代になると、雨漏りなど施設の老朽化が問題となり、再整備が検討され始めた。91年、現在地での建て替え工事が始まったが、96年に400億円を投じながら工事を中断。その後、都議会での議論を経て、2001年に当時の石原慎太郎都知事が豊洲の東京ガス工場跡地（約40ヘクタール）への市場移転を表明した。



ところが2008年、処理されたはずの土壌から、環境基準の最大4万3千倍にあたるベンゼンを検出。発がん性があるとされる化学物質の存在は、生鮮市場の建設地としてふさわしくない。にもかかわらず、なぜ候補地に選ばれたのか。ぬぐい切れない疑問に、築地市場で60年近く営業する水産仲卸大手「山治」の会長、山崎治雄さん(77)は言う。「一言でいえば、築地のこの場所が欲しかったんだと思いますよ」

築地市場は銀座から徒歩15分。都営大江戸線「築地市場駅」と、東京メトロ日比谷線「築地駅」の二つの地下鉄駅があり、広さは東京ドーム約5個分。そして何より、「東京最後の一等地」（ディベロッパー）だ。都は豊洲への移転費用4500億円のうち3500億円を築地市場跡地の売却で捻出する考えだった。「時の権力者にしてみたら、よだれが出るくらいほしい場所、そのためには魚屋なんか追っ払えと思ったんじゃないですか」（山崎さん）



東京に行った時、駆け足で築地市場を久しぶりに歩いた。平日の午前、場外市場あたりは、ものすごい人。外国人観光客も多い。前に日曜日に来たときは閑散としていたが、市場が開かれている平日は活気がある。いまや一大「観光スポット」だ。いろいろな店をのぞきこむ人、寿司屋前に並ぶ人など、とにかく人ごみで前に進めない。



こんな光景が「豊洲市場」で見られるとは思えない。生鮮市場としてふさわしくない豊洲への移転を抜本的に見直し、便利で活気のある築地で、これからも美味しい寿司を食べたいものだ。

(2016年11月23日)